

鎮守の森 探訪のすすめ

広報うしく市民特派員 齋藤 重

今回紹介するのは、JRひたち野うしく駅から学園西大通り線を進み、ひたち野西近隣公園と県立牛久栄進高等学校の間の右側に見える鎮守の森八幡神社です。

この住所は、牛久市東猫穴町です。「昔、猫という動物がいたから地名になりました」と地元の方が言っていました。日本の集落をみますと新しい住宅地や



奉納相撲の土俵

団地は別として、昔からの集落には必ずお宮があり、そのお宮にお参りすることは、その土地の守護神をお守りすることでした。つまり鎮守です。鎮守の社には必ず森があり、鎮守の森が東猫穴集落の要になっていいます。また、森は一般に水源であり、そこに人々は「神様」をお祭りしました。そして、必ずと言っていいほど祭礼があります。この八幡神社の祭礼の1つに秋の例祭があり、毎年旧暦の8月15日、すなわち今年9月25日(火)午前、境内で奉納相撲が神事として執り行われます。

なぜ8月15日に相撲が行われるのか専門家に聞きました。旧暦で秋の最中に行くことは俗に芋名月、栗名月とも言われ、本来サトイモや栗のような木の実の収穫祭であり、それに加えて水稻栽培に伴い稲の収穫儀礼とも結びつき、稲の実りのより豊かなるを祈るものであったといえます。もう1つの理由として放生会(奈良時代か

ら行われ陰暦8月15日八幡宮での祭礼儀式)が行われてきた日でもあります。八幡信仰の発祥地として知られる大分県宇佐八幡宮で、元正天皇の養老4年(720年)に宇佐八幡に祈って隼人を討伐しました。このとき八幡神は、殺した隼人の霊を慰めるため毎年放生会を託宣されたといわれ、毎年旧8月14日にみこしが和間浜に頓宮し渡御し、25菩薩の舞楽や六根さんげの行法を行って翌15日満潮の時刻に放生の陀羅尼を唱えつつ魚や貝を海中に放ってきたといわれています。このように八幡神は怨霊を鎮める情け深い神様とのことです。裏を返せば、祭らなければ、たたりをする恐ろしい神でもあります。この宇佐八幡より奈良大安寺の僧行教によって勧請されたという石清水八幡宮の放生会に相撲が催され、相撲節会に召された相撲人全員の奉仕が義務付けられたと「長秋記」保元元年(1156年)に記されています。祭りについて、



堂々とそびえる市民の木第1号「ケヤキ」

祭場は聖地とみなされ不浄を嫌い、女人立ち入りの禁怨が厳しく守られていました。また、祭りに相撲を行うのは集落の農作業の締めくくりと相まって心身のけがれを払うことであり、収穫を感謝し、住んでいる地域の平穏無事と幸福な生活を神に約束させる重要な役目を担っていました。なお、八幡神社には境内に、牛久市民の木第1号ケヤキ、第2号エノキがあります。共に400年の樹齢で大きな枝ぶりが見事です。

※相撲という文字は、中国西晋時代(256年〜316年)のとき晋書に記されています。すもうとは、中国語の相撲の音が転じた和語という説があります。